

文化のタイムマシン



アメリカ シアトル日本語補習学校 高等部 1 年

今田 慧

第 5 回日本語大賞 高校生の部 優秀賞 受賞作品

歴史。それは長大な時間を重ねて起きた膨大な事実を集めたものだ。その歴史の多くのおとぎ話を我々はどうやって知ることが出来たのだろうか？

一つは洞窟などに描かれた保存の良い絵、時代が下って彫刻や陶磁器などの芸術作品、さらには建築物やその遺構を解釈して当時の生活や文化を想像してきた。もう一つは石面や紙に書かれた文章を解釈して、もう少し直接的に当時の生活や文化を理解してきた。そう、人間は「言葉」を持って駆使している。過去の時代に言葉があつたからこそ、その時代のことがいろいろと分かつてきた。

幕末の三十年以上にわたる加賀藩御算用者猪山家の入払帳を見ると、その収入や支出の内容から、当時の加賀藩の下級藩士の生活や風習がはつきり読み取れる。時代をさかのぼって室町時代の貴族の自筆日記である『実隆公記』を見てみよう。この六十年以上にわたって詳細に書かれた日記からは、今度は武士ではなく当時の貴族の生活が手に取るように分かる。中の上くらいの家柄の貴族でもお金に困って借金をしていることや、貴族の間で囲碁や将棋を楽しんでいたことも分かる。言葉で書かれたこのような歴史文書がなかったら、こういった時代の武士や貴族の生活などが、こんなにも詳細にはわからなかったであろう。

さらに時代をさかのぼってみよう。日本には、千二百年以上も昔から、身分に關係なく、折に触れて、また機会があるごとくに、短歌・和歌を詠む文化があつた。それらの和歌も書物として伝えられている。それら膨大な数の和歌によく見られるのは、自分の思いや考えを直接的にはなく、間接的に遠回しに表す言い方である。例えば、恋文として重要な役割を果たしていた和歌の表現を見ると、自分の思いを間違いなく相手に伝えるのに、単に好きだ、愛しているではなく、いかに工夫を凝らして巧く表現するか、多くの時間と労力が割かれたのではないかと容易に想像できる。つまり、あまたの事物の中、形容詞・動詞などの中から、いかに直接的ではない適切な日本語を選んで、相手の心を射止めるかという文化を發展させてきたのである。あからさまに表現したのでは文学性も、身も蓋もなく、はしたないのであり、和歌としては失格なのである。日本人は伝統的に自分の考えや感情をあからさまに外に表さないという性格・民族性・文化と大いに關係があると思える。つまり、日本人は、話し言葉で自分の気持ちを直接相手に伝えるのでもなく、さらに書き言葉ではつきり表すのでもない、日本語で言うところの奥ゆかしい、外国人に言わせるとあいまいな表現方法を伝えてきている。

その文化は現代に入っても続いている。芥川龍之介や夏目漱石など多くの日本の作家はその文化を受け継いでいる。英語教師であつた夏目漱石が、生徒の「Love you.」の翻訳「我君ヲ愛ス」に対して、「日本人なら『月が綺麗ですね』と訳しなさい。」と言つたというまことしやかな話は、この日本の文化をはつきりと表している。原文が英語であつても、日本語に翻訳するときには、日本の文化に沿った表現に言いかえるのである。

この平安の昔から脈々と伝えられてきた、「思いや事実を直接的にあからさま

に表現しないで、間接的に、しかしより研ぎ澄まされた一段も二段もの高みに引き上げた表現にする」という日本語の文化が生み出してきた和歌やそれ以外の文学は、それこそ一つのことを、陰影を含めて多くの違った言い方で表せる日本語だから、生まれてきたのだと思う。それを受け継いでいる僕は、たとえばアメリカに住んでいて英語で教育を受けていようと、日本を誇りに思い、その文化をもつと習っていきたいと思う。

日本人は平安の昔からあからさまな表現を避けてきたという事実を含め、言葉があつたからこそ日本人の歴史が分かる。逆に現代の日本に起こる事実を後世に伝えるときにも言葉は重要である。言葉はその時代の日記である。過去を生きた僕たちの祖先のことを知り、今を生きる僕たちの文化を未来に繋ぐことができる。言葉は文化のタイムマシンである。